

てより広い思想史の流れに定位し得る一つの理由となっている。想像力によって過去の生の諸形式を、その現実在った形ではないまでも、少なくともその在り得たであろう形に再構成する事の重要性を強調する事で、両者は大幅な人間精神の拡大への扉を開いた。ウィーコにおいてはデカルトの理性偏重に抗う事によって、ヘルダーにおいては啓蒙主義が前提とする人間精神の普遍性に抗議の声を上げる事によって、十九世紀のロマン主義、歴史の世紀を先導する諸原理を、十八世紀において準備したのである。この反啓蒙主義という思想史上の流れを十八世紀の啓蒙時代の伏流として位置づけようとするパーリンの構図の当否如何は、二人の思想家を離れて一段上昇した高みから、検討していく必要がある。

最後に訳について気付いた点に触れておきたい。「反対改革」(四五頁)、「Wissen (知る) 対 Verstehen (理解する)」(七三頁)、「ナイーヴ」(一一九頁)、「コンスタンティヌスの『贈与の辞』」は、それぞれ「反宗教改革」、「Wissen (知解) 対 Verstehen (理解)」、「素朴な」、「ロンスタンティヌスの寄進状」ではないだろうか。加

えて、註の外国語文献をすべて訳出してあるのは、読者に如何なる利便を与えてくれるのだろうか。

ともあれ、時間の侵蝕を未だに拒否し続けている二人の卓越した思想家の諸命題をパーリンに導かれて旅する事は、無上の喜びであると信ずる。

(四六判 四一〇頁 一九八一年八月
みすず書房 三八〇〇円)

(芝井敏司 京都大学助手)

会 告

昭和五十六年度史学研究会大会および総会は、予定通り十一月二日(日)午後一時より楽友会館において開催されました。公開講演は小林健太郎、島田虔次の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終りました。

戦国末期土佐国の地方的中心集落

小林健太郎氏

極東思想史における三浦梅園

島田 虔次氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋季定例の理事評議員会において次の各氏の役員退任ならびに新任が承認されました。

退任 理事、今津晃 島田虔次 間

野潜龍(死亡) 評議員、市川

承八郎(死亡) 小畑龍雄 谷

岡武雄 護雅夫。

新任 理事、梅原郁、狩野直禎 樋

口謹一。評議員、茨木慶三

愛宕元 河内良弘 勝藤猛

木下良 桑山正進 田村満穂

西谷真二 前川和也 森正夫。

(理事・評議員間の移動については省略)

戦国末期土佐国の地方的中心集落

小林 健太郎

わが国では安土桃山時代から江戸時代初頭にかけて数多くの近世城下町が封建領国の首都として建設され、近世的都市網の基本的骨格が形成されていったが、その背景には、当時すでに全国各地で地方的な中心集落としての市場町が無数に発達していたという状況があった。そこで筆者は、太閤検地の一環をなす『長宗我部地検帳』が領国全域にわたって残されている土佐国を対象に選び、当時の地方的中心集落の景観復原を通じてその歴史地理学的意義を検討したい。

『長宗我部地検帳』は土佐全体で二三ヶ所の市町を登録しており、それらは規模とプランの点から三つのグループに分けられる。第一のグループは大高坂新市と大高坂朝倉市で、これらは共に長宗我部氏が土佐一国の首都として建設した近世城下町の市

町地区を構成するもので、その面積は両者を合せて一五町余に達していた。

第二のグループは岡豊新町、中村、高岡市、安芸新町の四か所で、町並は走向を異にする複数の街村または長大な一本街村をなしていた。いずれも戦国期の有力大名の城下市町に由来するものであったが、その影響圏は一郡ないし数郡をカバーする程度の地域的経済圏の範囲にとどまっていた。

第三のグループは黒岩新町、弘岡市など一八か所を含むもので、町並は延長五〇～四〇米の一本街村にすぎなかった。その活動も戦国期の小領主の領域に由来する地域をカバーするにすぎず、近世の在町に相当するものであった。

戦国末期の地方的中心集落がいずれも第二・第三のグループに相当するにすぎなかったという状況の中で建設された近世城下町は、一国規模の影響圏をもつ地方都市の出現を意味するものであった。

極東思想史における三浦梅園

島田 虔次

『東洋史研究』三八巻三号に発表した

「三浦梅園の哲学―極東儒学思想史の見地から」は、その副題の趣旨を殆んど全く論じえなかった。それを補足したい。

中国の気の思想の哲学化は宋の張載に始まり、朱子学に余すところなく吸収された。この気学は極東朱子学世界において如何なる展開を見せるか。朝鮮李朝の理発気発の長期論争はまだ十分に研究していないので姑く論外に置かざるを得ないが、中国においてはそれは清の戴震（一七二四年生）において最後にして最高の段階に達したといわれる。然しその哲学はあくまで儒教伝統の人性論の範囲を出るものではなかった。

戴氏は西洋天文学にも深い理解をもっていたが、その宇宙認識が彼の気の哲学の基底をなしているというおもむきは全然ない。ところが戴氏の同時代人梅園（一七二三年生）の場合、気の哲学の流れにジェズイットの伝えた、そして明末の中国学者たちによって咀嚼せられた西洋天文学（地球体説など）をとり入れ、厳密な論理と方法意識（――の論理、懷疑と反観合一の方法）

に基いて、究極存在（二元気）・時間・空間・天体現象・動植物―無生物界・人間的諸現象（身体、心理、人倫）、を貫ぬく精細に

して整然たる条理の学を樹立した。彼が一毫も前人に資らずと誇ったのは完全に正当であるが、然も大きく見て気の哲学の流をうけていることは否定すべくもない。彼は伝統的気の哲学より五行説を排除し（仁斎、懷徳堂すでに然り）て陰陽のみを採るが、鬱淳の神の説をたてて伝統的な生々の思想を、気物（天地の説をたてて伝統的な大地——小天地の思想を、あらたに根拠づけ、しかも天人相関説はきっぱりと否定した。天地は活物（仁斎、徂徠すでに云う）という認識をうけつつも、それゆえ理論的なものを死せるものとして排除するのでなく、逆に周到な論理的思弁によってそのことを理論づけようとした。……要するに梅園の哲学は、西洋自然学と当時の日本の思想状況を媒介として気の哲学を改造し、自然哲学として展開したものであり、気の哲学は清の戴震とわが梅園において、同時にまたそれぞれの方向に、最後最高の段階に到達したのである。ただし、その哲学思想としてのスケールと厳密性体系性において、戴氏は恐らく梅園の上に出ることはできない。

なお、梅園の社会・政治論は全般に頗る

編集後記

昨年の豪雪とはうって変わった比較的穏やかな氣候で今年は始まりましたが、「寒」に入ると共に本格的な底冷えを感じるようになりました。本号の発行が大変遅れましたことを、おわび申し上げます。専従の編集担当をおかず本務のあいまをぬうようにして編集作業を進める雑誌の、いわば宿命のようなものとはいえ、心苦しく存じます。

さて、本号は様々な時期や地域、領域を対象とするレベルの高い力作がそろったバラエティーに富むものとなりました。もっとも、前号に掲載しました一九八一年度の総目次でもおわかりのように、「論説」と「紹介」以外の論稿が本誌には少なく、本号のようなものは近頃では珍しい例に属します。「論説」は申すまでもなく、他の分野にも力作をお寄せ下さいますよう、お願いいたします。

ところで、既にお気付きの方もいらっしゃると思いますが、本号から、中国語の

ローマ字の表記方式を、従来のウェード式から「併音（ピンイン）」に改めました。これは、「併音」が欧米でも中国語表記の主流に現在なりつつあり、将来はそれにほぼ統一されるだろうとの認識に基づいた処置です。

本号がお手元に届く頃には、吉田神社の節分祭もとくに終り、参道はいつもの通学路に戻っていることでしょう。そして春は、暦の上だけではなく、確実な足どりで少しずつ近づいていることでしょう。本年もまた、実りの多い年でありますように。

（光）

史 林 （第六五巻第一号）

一九八二年十二月二十五日印刷
一九八二年一月一日発行 定価九〇〇円

発行人 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部

理事長 樋 口 隆 康

印刷所 中村印刷株式会社

京都市下京区七条御所ノ内中町五〇